カリガリ博士の異常な愛情

あるいはベルリン1936

加藤直

ハンス・ヤノウィッツとカール・
マイヤーの原作による
カリガリ博士の異常な愛情
——あるいはベルリン 1936

1984年12月25日　第1刷発行

定　価　1200円
著　者　加藤直
発行者　宮永捷
発行所　有限会社而立書房
東京都千代田区神田神保町1丁目20番地
振替・東京9-174567／電話03(291)5589
印　刷　科学図書印刷株式会社
製　本　大口製本印刷株式会社

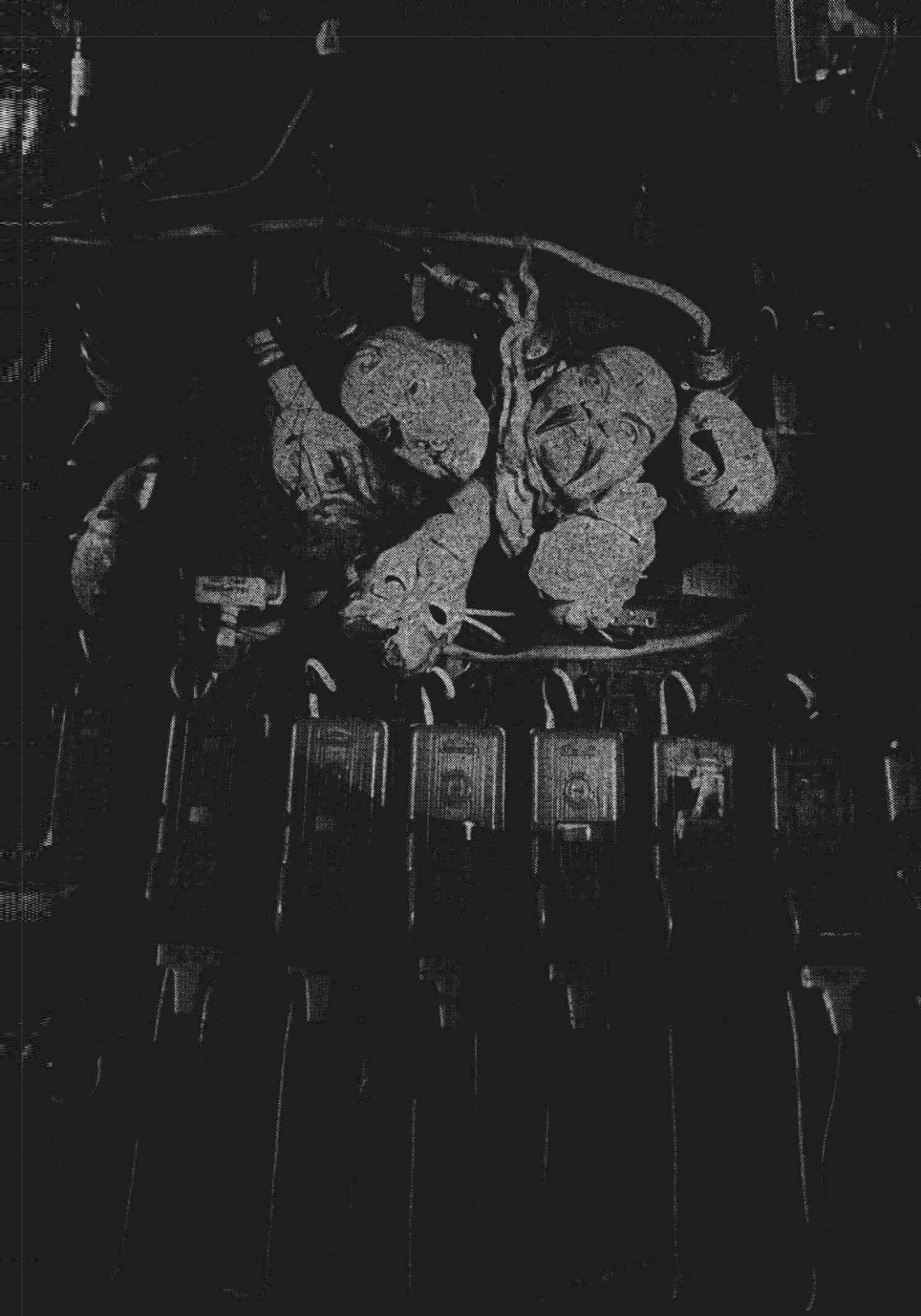
落丁本・乱丁本はおとりかえいたします　0074-0723-3359
©Tadashi Kato, Printed in Tokyo, 1984

ハンス・ヤノとカール・マイヤーの原作による

カリガリ博士の異常な愛情

あるいはベルリン1936

加藤直



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

カリガリ博士の異常な愛情　7
解説　森　秀男　104
楽曲　林　光

写真・望月正夫
装幀・高麗隆彦

ハンス・ヤノウィッツとカール・マイヤーの原作による

カリガリ博士の異常な愛情

あるいはベルリン一九三六

登場人物

カリガリ博士
眠り男セザーレ
小説家フランシス
探偵アラン
制服の美少年1
　　2
　　3
ホテルの主人
娘リダ
街の男1
　　2
　　3
　　4
死体（人体模型）
食事する動物たち
　猫舌の竜
　蝶現実主義者
　一本足の百足
　燃える麒麟
　吃驚蛙たち

1　悲しきカリガリ（発端そして大団円）

漆黒の闇――。

遠くから大仰な、だが気味の悪い笑い声が近づいて来、たちまち辺りを覆う。とみるや宙空に忽然と姿を現わすカリガリ博士とセザーレ。

カリガリは大きなマントを羽織りシルクハットを冠った黒装束。一方、白面の美少年セザーレは博士の傍らに立てかけられた黒塗りの棺桶に入って立ったまま眠っている。

カリガリ　あたいの名前はカリガリ。あんたはセザーレ、眠れる妹。旅廻りの無頼漢（ゴロツキ）に感謝をすませて接吻しちゃお。（と棺ごとセザーレを抱く）なんてったってあたいたちは兄妹なんだ。それにあたいたち二人はずうっと昔にこういう風して一緒に遊んだような気だってする――（が観客席からの視線に気づき慌ててポーズ）嗚呼っ！　わたしは蝶をつかもうとする蟹であろうか。はたまた月を抱こうと野心する蠍であろうか。わたしにだってあった少年の頃、わたしは何か定かならないむずむずと蠢くような恐怖が惹き起こすとてつもなく秘密めいた光景を夢見たものだ。わななくような不安。薄気味悪い想像を絶する出来事が待ちぶせる夜の闇――そう、死の館が美と精神の住み処へと変貌する瞬間を待ち望んでいた。だが待つ身は辛い、辛いは待つ身。待つ身の辛さを花よりタンゴでも踊って過ごしたかった。過ごしたかったが、さて、お立ち会い――

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

とこの頃、矢鱈気持を高ぶらせるためだけの効果を持つ映画音楽のような音楽が聞こえてくる。
そしておまけに何処からともなくやってくる飛行機の爆音がそれに加わったものだから、いやがうえにも音楽はB級戦争映画のサウンド・トラック盤といった印象になった。となるとカリガリの声だってもしかしたら機械の向こう側から——

カリガリ　我が友セザーレは斯くの如く立ったまま眠っておる。生きている死もしくは死せる生の立像として頑なに我が願望のタンゴの相手を拒んでおる。でもね、わたしの田螺のお耳には不可視のタンゴのステップがいつも聞こえる港町なのだわ。がしかし再びお立ち会い。このセザーレは唯の悲しき玩具にあらず。人形(ブンブン)にあらず。世にも不思議な能力により世の為人の為に眠ったままお役に立とうという健気な眠り男でござる。不思議な能力——一体これを不思議と言わずして他の何に心を震わそう。我が愛する無垢なる心は諸君らが発するあらゆる質問、懐疑に答え、また御希望とあらば諸君らの過去も未来も透視して運命をば予言することができるのである。セザーレ、セザーレ、お前の遊んでいる魂を呼び戻せ。セザーレ、起きよ。わたしの、カリガリの命令じゃ。眠ったまま眼を覚し皆様の運命を話しておあげ。

音楽高まる。とともに飛行機の音接近して来、みるみる大きくなる。
そして闇の中を一条の白光が走り、カリガリの額に衝突、大音響をあげ、落ちる。それは銀色の紙で折ったありふれた型の紙飛行機であった。
カリガリは裂けた額の傷口から流れる血に染まり、絶叫をあげながら暗闇に落下していく。

2　失楽の園

線路。

線路は一方遙か彼方のトンネルから、もう一方遙か彼方に鬱蒼と生い茂る森と塔へと続いている。目差す街はその途中のどこかにあるはずなのだが——。

旅仕度に身をかためた二人の男がトンネルの方からやって来る。一人は顔を包帯で巻いた三文小説家フランシス。もう一人はその友人髭の探偵アランである。

フランシス　心臓に杭。

アラン　肝臓に韮。

フランシス　扉に大蒜。

アラン　飛び魚に天麩羅。

フランシス　墓に罌粟。

アラン　腹痛に毒消し（と転んだ）——

二人は尻取り遊びをしながら枕木を飛んで来た。

フランシス　〈墓場の中からわたしは駆りたてられて、なおも失った財宝をもとめ、なおも失われた男

を愛し、その男の胸の血を吸うのです。その男が終わったら、つぎの男をもとめてさまよわねばならぬ。〉

アラン　どこまで行ってもきりがない。

フランシス　ギョエテです。

アラン　へっ？

フランシス　吸血鬼文学の好個の典型です。死と愛の見事な結合。ロマン派の勝利——

アラン　あ、そう。

フランシス　アラン君、君だってあるでしょう？　こんな目に会ったこと——

アラン　どんな目？

フランシス　探偵である君はさまざまなる遁走事件を追いかけますね？

アラン　ああ、その目ね。

フランシス　ふと見ると街角に貼られた犯人の人相書が君の顔にそっくりだなんていうこと——

アラン　ないね。

フランシス　ない？

アラン　帰ろうよフランシス。

フランシス　探偵小説が文学と認められない所以がここにある。

アラン　じゃあ君のドラキュラさんが吐く息は文学の香りを醸し出してるとでもいうのかい？

フランシス　吸血鬼の吐く息はあくまでも生臭くなくてはならないのだよ。

アラン　俺は帰るぜ。行くんなら君一人で行けばいい。

フランシス　御機嫌斜め、横にしてニッコリ、縦にしてスッキリ。

アラン　さっきの事故で気がすっかり滅入っちまったんだ。

フランシス　ボクは気に入った。

アラン　このぼんやりした埃っぽい場所がね。

フランシス　魂(ブランケ)の夜の活動にもってこいの雰囲気だもの。

アラン　なるほど、吸血鬼の専門家には興味深いことだろう。

フランシス　よし、ボクがその道の専門家だとしよう。憂鬱症の吸血鬼(ヴァンパイア)を主役に三文小説と批評家たちに蔑まれながらもベストセラーを世に送り出してきたとしよう。だが我が小説の読者、健全なる大衆は一筋縄ではいかない。莫大な数の恐怖を体験しちゃってるから、高々しれた想像力では追いつかないんだ。

アラン　それで僕の依頼された事件にわざわざついてきたってわけか。

フランシス　カリガリ博士の街。カリガリ博士――。どうしてどうして響きからしてゾクッとしちまう。健全なる大衆を心から震撼させる新しい誘惑者物語はまだ書かれていないのだ。マンネリズムのスタッカートの間に落ち込んだ溺れる作家のワラベはミタリ――

アラン
フランシス　ノナカのバカ――

アラン　しようがない、君がそうしたいって言うんならそうするさ。

フランシス　ありがとうアラン。あ、すまない。包帯見てくれないか。弛んじまった。

微かに行進する足音が聞こえてくる。

フランシス　覚えているかい？
アラン　まるで空襲――
フランシス　汽車がトンネルへ入ったと思ったらいきなり大音響――
アラン　光が先かね？　闇が先だったかね？
フランシス　大した事故だった。
アラン　ああ、全く凄かった。おかげでこうしてトンネルからずっと歩かされて――何時だね？
フランシス　生憎時計が止まってる。
アラン　俺のもだ。
フランシス　どれくらいになるだろう、トンネルを出てからさ？
アラン　そろそろ一時――
フランシス　一時――一時も歩き続けて街に行きあたらないばかりか少しもあそこに見えるあの塔に近づかないとは。
アラン　あちらにバビロンの空中都市があるかと思えば――
フランシス　こちらには海底都市アトランティスがある。

アラン　おまけにふりかえると月を凌いで屹立するかのバベルの塔だ。
フランシス　そのくせボクたちの目差す街には一向に出くわさない。
アラン　たしかなんだろうな。あの塔目差せば途中に街があるっていうの。
フランシス　死ぬ間際の車掌の言葉だ。嘘は言うまい。
アラン　とすると――
フランシス　迷っちまった？
アラン　線路づたいに歩いてきたんだ。迷えってもできない相談。
フランシス　迷子になってもボクかまやしない。分別もって迷ってりゃいい。お祖父さんは言ったね

――

アラン　しっ！（と、前方に目を凝らす）
フランシス　しかし、いささか歩きすぎ、ボクの分別にも肉刺（まめ）が出来――
アラン　見た、ね？
フランシス　あはは、冗談。見えるはずない。だって分別の肉刺とは――
アラン　ずうっと向こう、左から右線路の上を横切った。
フランシス　われらが迎えの犬狼の群、うわぉーん。
アラン　来る。来た！

と、四人の街の男たちが柩を担いで登場。葬式にしては陽気だが、葬式。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com